

対談

命をあきらめない未来へ 心のバリアフリーで災強国家に



株式会社タフ・ジャパン 代表

かまた のぶひろ
鎌田修広

昭和44年(1969)、神奈川県生まれ。日本体育大学社会体育学科卒業、横浜市消防局へ入局。消防訓練センターの体育訓練担当教官となり、三千人を超える職員の新たな体育指導法を確立、総務省消防庁消防大学校における「消防体育訓練」講師等も担当。平成23年、退職し、防災研修や人材育成事業を行う㈱タフ・ジャパンを設立。代表取締役となる。著書に『消防筋肉』『消防メンタル』(イカロス出版)がある。



株式会社ジンリキ 社長

なかむらまさよし
中村正善

昭和33年(1958)、東京都生まれ。東京写真大学(現在の東京工芸大学)卒業、金融系のコンサルタント会社に就職。長野県上高地の観光振興に携わった際、車いす利用者の呼び込み策の一環として開発をスタート。その後、東日本大震災を機に起業を決意。平成24年に株式会社ジンリキを創業し、現在に至る。

撮影＝能仁広之

「車いすで山登りを可能に

鎌田 中村さんが世界で初めて開発した「ジンリキ」。先ほど実際に体験してみても、「押して動かす」という従来の車いすの概念を覆す、まさに革命的な補助具だと実感しました。

人が乗った状態で車いすを後ろから押すと、たった一センチの段差を越えるのにも、相当な腕力がいるものです。それが、このけん引式のレバーを装着し、人力車のように引くと、嘘のようにらくらく乗り越えられました。坂道やぬかるみ、雪道も車いすでどんどん進めるといいうのも、うなずけます。

中村 これを自分の車いすにつけて、ご家族と八百メートルも登山を楽しんだ方もいるんです。我慢もせず、支度もせずに、どこへでも出かけられる。そんな車いす利用者の夢を現実にするために、この「ジンリキ」を開発しました。扱い方の特別な技術などは何も必要ありません。現在、世界に普及している車いすの九割に後付け、ワントッチで装着できます。

先ほど体験いただいたように、原理

はとてもシンプルです。けん引のバーを車いすにつけ、前から引っ張ることです。「この原理」が働きます。それにより前輪が浮いて、負荷が軽くなり、加えて、引く人の体重と体全体の力を利用できるため、走破性が一気に高まるわけです。

鎌田 中村さんが車いすに乗った状態でバーを持ちましたが、大人の男性一人が乗っているとは思えないほど軽く、片手で楽々と前輪を浮かせられました。女性や高齢の方など、腕力が強くなくても引くことができますね。

中村 小学生のお子さんでも引けますよ。足の不自由なお父さんの車いすをお子さんが引きながら、家族で登山や海水浴を楽しむなんてことも、無理なくできるようになります。

鎌田 中村さんが開発のキーワードとされている、車いす利用者の方が「出かけることをあきらめない」世界がイメージできますね。

中には「前輪を浮かせて引く」と聞くと、車いすがひっくり返るんじゃないかと心配に思う方もあるかもしれませんが、乗る側になって体験しましたが、

そういう不安も不安定な感じもまったくないですね。

中村 故意に「ひっくり返そう」と思っただけを高く上げたとしても、決してひっくり返ることはありません。安全安心な福祉用具として認定もされており、介護保険の適用も可能です。高齢化が進む中、介護をする側の負担減にも貢献できればと思っています。

これで同じように生きていきます

鎌田 長く消防の世界にいた私としては、この「ジンリキ」は「防災」の用具としても画期的だと感じています。

私が初めて中村さんと「ジンリキ」の存在を知ったのは、昨年10月の末でした。自宅でテレビの録画を見ていたら「起業家のキセキ」（テレビ東京系列）という番組で、中村さんの開発ストーリーが紹介されていたんです。翌週に迫った防災イベントをいかに成功



江ノ島（神奈川県藤沢市）を車いす利用者にやさしい環境にしようと鎌田さんが企画した平成の「強力」企画（強力はかつて江ノ島に存在した荷揚げ役の通称）。「ジンリキ」を使って車いす利用者を頂上まで搬送することに成功した

させるかに頭を悩ませていた私は「これだ！」と思い、深夜にもかかわらず、中村さんへメールをしてしまっ……（笑）。一度も会ったことのない私のお願いに、中村さんはすぐに返信をくださった。

中村社長が開発した車いす補助具「JINRIKI (ジンリキ)」。一般的な車いすに後付けでき、1cm単位で幅の調節が可能。レジャーや荷物の運搬にも活用が見込める。
問い合わせは 050-5835-1000 (株)ジンリキ まで



中村 「ジンリキ」を一台借りて使いたいというお申し出でしたよね。私はあのとき、鎌田さんが江の島でやろうとされていた「強力」という防災イベントの理念とビジョンに、とても共感を覚えたんです。

鎌田 ご支援、ありがとうございます。景勝地として知られる江の島は「東京2020オリンピック・パラリンピック」でセーリング競技の会場に決まっているのですが、いまだ完全なバリアフリーになっていないんです。もし大地震があつて津波警報が発令された場合、車いす利用者は、自力での避難が困難です。三年後のパラリンピックでは、世界中から車いすの選手や観客が集まることを考えれば、早く手を打つ必要があります。

とはいえ、行政に「やってくれ」と言い続けるだけでは前に進みません。そこで地域の人を巻き込みながら、実際に人の力で車いす利用者を江の島の頂上まで搬送できるか、検証する企画をやったんです。ボランティアの車いす利用者を中心とした搬送チームを七班つくり、それぞれに市販の防災用レスキューシートを試してもらったのですが、その一つに「ジンリキ」を活用させていただきました。

往復四百五十段を事故なく、とてもスムーズに昇り降りができ、防災の大きな力になると実感しました。

中村 東日本大震災をきっかけに津波避難の対策が見直されていますが、そのほとんどは自力で逃げることでできる人を前提にしたものです。「津波が来たら、あきらめるしかない」という思いでいる車いす利用者は少なくありません。それを痛感したのが、開発から一年たった二〇一二年、ある自治体の避難訓練で試作品をテストしてもらったときのことです。

津波を想定して高台まで逃げるというその訓練で、「ジンリキ」を使つたすべての車いす利用者が、健常者と同じタイムで避難することができました。すると、一人の車いす利用者の方から、こう言われたんです。

「あなたは命の恩人です」と。その方はずっと「津波が来たら、その時点で家族の人生は終わりだ」と思っていたそうなんです。奥さんや子供には「おれを置いて逃げる」と言っているものの、愛する家族を前にそんなこと、できわけがないじゃないですか。最後にその方が言った言葉が、心に突き刺さりました。「これでみんなと同じように生きていきます」。わずか数センチの段

差のために落とす命がある。「その人たちの命を救うことは、私に与えられた使命だ」とそのとき、強く思いました。

東日本大震災からちょうど二年後の二〇一三年三月十一日、ついに「ジンリキ」を完成することができました。

命をあきらめない

鎌田 防災にかかわる仕事の原点として心に刻んでいるものがあります。東日本大震災で亡くされた奥様のご遺体をご主人が発見し、泣き崩れている様子を報じた写真記事です。

その奥様は地震発生のとき、勤めている福祉施設の中におられ、館内の車いすの方々を避難させようと努力しているところで、津波にのまれてしまったんです。災害に強い人づくり、街づくりを本気で進めなければ、また同じことが繰り返されてしまう。時々、この記事を見返しては、「自分は本気でやっているのか」と自分を問い直しています。

中村 私は「ジンリキ」開発において「出かけることをあきらめない」こ

とともう一つ「命をあきらめない」もキーワードにしました。誰もが同じ重さの命です。簡単にあきらめていい命なんてあるはずがない。でも、今の日本では、車いす利用者の「命をあきらめる基準」があまりに低く置かれたままです。

昨年、とても残念な経験をしました。ある自治体の避難訓練が河川敷で行われると聞き、「ジンリキ」を使って車いす利用者も交えての訓練にできないかと行政に尋ねたんです。すると前例がないことを理由に受け入れてもらえませんでした。それでもあきらめきれず、安全な方法を何度も提案し続けたところ、最終的にこんな理由で断られたんです。

「車いすが入ると、芝が傷むから」。

ありえません。私は行政を非難したいわけじゃなく、これが日本の現状だと理解してほしいんです。これだけ災害が相次ぐ日本でも、いまだに多くの地域で、以前と代わり映えのない避難訓練が繰り返されていないでしょうか。私は聞きたい。「避難訓練はイベントですか、お祭りですか、ノルマですか」と。

鎌田 まったく同じ思いです。車いすで外出したことがない人にとつては、一センチの段差を越えるのがいかに難しいかが理解したいのでしょうか。平時の視点から避難路を整備しても、地震でそこにモノが落ちてきたり、地割れでもしたら、車いすの方は進めません。利用者の方だけでなく、どれだけ多くの行政の方、地域の私たちが「自分ごと」として自覚し、行動できるかです。

世界一のバリアフリー国家に

中村 その点、いろんな避難訓練のお手伝いをする中で、地域には「宝物」があることを発見しました。それは子供たちの力です。「大人が守ってやる必要のある存在」と思われていますが、やり方によっては大人よりもパワーを発揮します。例えば「ジンリキ」を使えば、子供一人で大人も避難させられるし、重い救援物資だって運べます。

鎌田 子供は素直なので「災害心理」にもかからないという点もありますね。

先入観を持ちやすい大人は地震や火災が起きると、すぐに逃げずに周りの様子を見たり、「まだ大丈夫なはず」と思い込み、逃げ遅れてしまいがちです。防災実績が出ているところの多くは、子供が初動体制をとっています。

中村 私のアイデアですが、学校の道徳教育として、車いすや障がい者の方を見かけたら、「何かお手伝いできませんか」と自分から声をかける。そんな「心のバリアフリー」を広める教育ができないでしょうか。道路や水道などのインフラ整備率でいえば、日本は世界トップクラスです。なのに車いすの方がなぜ暮らしにくいのか。街中で声をかける文化がないからです。

鎌田 昨年の江の島でのイベントの際、協力いただいた社会福祉法人の理事長の方がこう言ってくださいました。「私は江の島を便利な街にしてほしくないの。人の絆で助け合える街にしてほしい。それが文化として根づくまで二十年、三十年続くプロジェクトにできるなら協力します。中途半端な気持ちならやらないで」と。災害に強い街づくりは「人づくり」からであり、そ

れを可能にするのが教育です。

私には道徳の力で災害に備える「防災道徳教育」を日本中に広げたいという夢があります。江の島のプロジェクトもその一つです。今度は五月の「ゴミゼロクリーン」の海岸清掃の日にあわせて、車いす利用者の方を避難誘導する、サプライズ訓練をぜひ成功させたいと思っています。「あなたはあの車いすの方について」なんて指示はしま

せん。目の前で助けを求めている車いすの方に、自分はどうすべきか。いい意味で、自問自答してもらいたいんです。そこでは、ぜひ「ジンリキ」を使いたいと思っています。

中村 日本人の心の力を掘り起こせば、日本は世界一のバリアフリー国家になる、絶対にそうなれると私は信じています。共にバリアを超えていきましょう。

